に班し、御近習番・改作奉行・學校横目に歴任して、弘化中に歿した。重秀學に邃く、また少壯より劍術に精しくして門人甚だ多かつた。重秀一諱は貞秀。河北郡傳燈寺に在る本多利明の碑文の撰者として名を錄したもの亦貞秀とする。諸士系譜にそれを貞秀とするものは恐らくは非であらう。

セキジシユウロク　摭事集錄　三十八册。今枝恒明著。初に武家混目集に載せた加陽年譜を記し、次に四册御定書及び享保・元文年間の定書を載せ、前田吉德・宗辰の卒去の次第、大槻事件に關する落書等を集錄してある。享保十三年著者が蟄居を命ぜられてから後の編輯である。

セキジツホクカロク　昔日北華錄　三卷。單に昔日北華ともいふ。堀麥水の著。序文に藤周民とあるのは、矢張り麥水のことらしい。富樫氏が加賀介に任ぜられてから以降、前田氏の兩支藩分立の頃までのことが記されてゐる。別に富樫家譜と題した本もあるが、それは昔日北華錄の卷首に、梗概めいた文を加へたものに過ぎぬ。富樫家譜には『寶曆十四年皐月中旬東窗寫』の奥書があるものもある。

セキシヨ　關所　加賀藩では、越中の東境に新川郡境關所があり、能美郡に別宮・河原山、石川郡には木滑の口留番所があつた。大聖寺藩には、大聖寺城下の盡端越前口に向かふ所に關所があり、今も關町の名を存する。この關所は享和三年七月また口留番所と改められた。又國境に橘の番所があつた。是等は固より大聖寺藩の士卒の守備する所であつたが、加賀藩に重大事のあつた場合には、直に人を遣はして之を警戒せしめた。明治二年三月廿六日行政官の命により皆撤廢せられた。

セキシヨガイツイホウ　關所外追放　↓ツイホウ　追放。

セキスケババ　關助馬場　金澤淺野川の右岸今馬場と稱する地で、歩組祿百石佐賀關助が博勞支配・兼馬具支配の職に在つた爲、ここに荒廢して居た馬場を再興したものと見える。是に就いては松平三代家譜に、前田利常が駿馬を好んで關助馬場へ出覽あり、且つ自ら調馬をも試み給うたとあり、又寛文四年に關助馬場の沙運びの入札のあつたことは御郡方帳にあるが、それより前のことは町會所の舊記にも見えない。此の馬場の延は百六十七間、袤は二條を併せて十三間三尺、土居七尺であつた。又此の邊りに淺野川御厩があつたが、元祿三年の大火に延燒した。

セキゼンザエモン　關善左衞門　元祿年中の人。富田五郎右衞門から勢源流劍術の奥秘を受けたといふ。

セキソウ　石叢　↓ハヤシヤセキソウ　林屋石叢。

セキソウテツシユウ　石叟徹周　金澤曹洞宗天德院十一代の住持。明和五年十月四日寂。

セキゾロ　節季候　藩政の時、十一月冬至に節季候といふ物貰ひの藤内が來た。『せきぞろ〳〵』というて歳末の祝詞を列ね、終に『來年春參る』といふのは、彼等が新年になつて福の神などの物貰ひになつて再び來る意味であらう。節季候は男子で、菅笠の裏に竹枝を挿んだのを戴き、紅木綿の覆面をなし、襟に茜木綿をかけ、蓑を着、二人相伴ふを常とした。

セキタイシソウ　石臺詩草　伊藤暇著。一册。各體の詩四百四十九首の外に文十四編が收められて居る。著者は頗る多作の人であつたが、歿後その稿を家に留めてなかつた。因つて門人賀古清廉・大脇憲がこれだけのものを各所から拾ひ輯めたものである。

セキタカカズノヒ　關孝和の碑　安政四年算聖關孝和の百五十回忌に當つて、金澤の有志が記念の爲建てたものである。その一は野田寺町立像寺の門内にあり、關先生之墓と題し、一は卯辰山觀音院境内に在つて算聖關先生之墓と題する。前者は士人中野正直等の企になり、後者は市人福久屋儀三郎等の手に成る。

セキテン　石天　↓ホジユンセキテン　補準石天。

セキドウサン　石堂山　江沼郡大聖寺の附近に在る。一名愛宕山。慶長五年八月前田利長が大聖寺城を攻めた時、此の山に陣を布き、諸軍を指麾したといふ。

セキドウサン　石動山　鹿島郡に屬し、寶達山脈が北方に延びた中で最高點を占めるもので、海拔五六五米。その南半は第三紀層を以て蔽はれるが、基盤は片麻岩から成り、頂上近くに式内伊須流岐比古神社及びそれに奉仕した石動山天平寺があつた。廻國雜記に『石動山に參詣して法樂し奉る。動きなきみよに鬘りて石動の山とは神や名づけそめけん。』と載せる。明治以降寺坊皆廢し、今伊須流岐比古神社があるばかりである。↓テンピヨウジ　天平寺。

セキドウサンインナイ　石動山院内　鹿島郡に屬し、藩政時代では多根の一村のみを含んで居た。

セキドウサンエンギ・石動山緣起　一册。『貞享三年五月西洞院宰相時慶書ニ記之ニ』と奥書ある石動山緣起略、林道春筆のものに對して古緣起と稱せられる石動山緣起、寛永二年四月廿五日前田利光の與へた石動山天平寺制法式目、貞享四年九月五日天平寺衆徒から御室御所に對して天平寺の勅願寺たる綸旨を得るの周旋を請うた願書、貞享二年同寺衆徒から加賀藩の寺社奉行に提出した寄進狀目錄、是等を合はせ記したものである。

セキドウサンコエンギ　石動山古緣起　一册。能登石動山伊須流岐比古神社の緣起で、『康治二年五月日依ニ舊記ニ書レ之、筆記西洞院權中納言時興、校合諫議大夫尚書實親』とあるものであるが、もと同山の浮屠によつて作られたものであらう。

セキドウサンゴシヤゴンゲン　石動山五社權現　↓イスルギヒコジンジヤ　伊須流岐比古神社。

セキドウサンシヤドウテラヤシキジヅメチヨウ　石動山社堂寺屋舗地詰帳　一册。石動山内に於ける諸堂・諸坊の廣袤・面積及び所屬並びに退轉の諸坊名を記載して、慶安二年三月一日波着寺・明王院・寶憧寺から寺社奉行岡島市郎兵衞・葛卷藏人に提出したものである。

セキドウサンシラヤマシヤ　石動山白山社　鹿島郡石動山に鎭座したもので、白山本宮の大永七年の託宣記に、白山下七社を數へた第二に石動と載せられてゐる。

セキドウサンテンピヨウジエンギ　石動山天平寺緣起　承應三年前田利常の命によつて、林道春の起草したものである。しかし、道春は一も之が沿革を知ることができなかつ